

[V]-3 一酸化炭素中毒間歇型に対する高圧酸素療法

(九州労災病院) 宮崎 勇, 望藤 脩
(九州大学 神経内科) 猪口哲夫

一酸化炭素中毒統合失調症のうち、間歇型、或は両発型は稀なもので、従つてこれに対する高圧酸素療法の機会も少ない。しかし、数少ない報告例の中には有効と考へられ、症例も散見される。本症に対する確證的な治療法がない現状、本療法の効果の有無を明らかにすることは重要である。私は本年に入り3例の間歇型について高圧酸素療法を行う機会を持ち、手は急性期より充分な治療を行ったのに拘らず、症状遷延し、更に雨傘をかけた他の1例を経験したのでここに報告した。

高圧酸素療法は本院高圧医療研究部の大型タンク内に、医師、看護婦の監視、介助の下に行われ、最高圧2.8~3.0ATAで合計60分(1回)のO₂吸入を行った。1症例について合計10~13回の治療を行い、症例4においてはタンク内で治療前後の血中酸素分圧、その他も測定した。なお、すべての症例について、本療法と平行してチトクロームC、GABOB、Centrophenoxin なども用いた。従つて、本療法の効果判定は極めて困難であつたが、治療の前後で精神神経症状の著明な改善もみられた場合は有効とし、自然覚醒の可能性も考慮される一方、本療法の効果も全く否定しえない場合、有効疑とした。次に各症例を述べる。

症例1は63歳の男子、煤炭コタツの火の不意に意識消失、19時前後に覚醒され、その数時間後覚醒したところから24日間の無表情期のうち、無表情、下着のまま歩行に入るなどの行動異常が現われ、3日病日当科に入院。入院時著しい失見当ゲルストマン症候群、失行などのほか行動過多、常同行動、徘徊などの精神症状も認められた。脳波には2~3/sの δ -burstが主に両側前頭部以下に出現。入院後2週目から約3ヵ月に亘り、合計13回の高圧酸素療法を行った。当初の2回の治療で著しく、10日目前後から身体固式障害が軽くなり、異常行動も減少、約1ヵ月後から更に精神症状、大脳解剖学的状態は徐々に改善し、3ヵ月後には視野狭窄、計算力低下も軽くなり、残すのみとなり退院した。本症例は13回に亘る治療の各々の特徴は、劇的な改善は認められなかったが、3ヵ月の経過で軽快したものである。

症例2は47歳の男子、煤炭コタツ内で急性一酸化炭素中毒に罹患、30分後昏睡状に覚醒せられた。約3時間後覚醒し、3日目には外で元気に走り回れるようになった。ところが5日目の夕方から頭痛、嘔吐について意識混濁を来し、翌朝視力低下と訴へると共に頭痛も一段と漸しくなった。その5日後、本院入院。当時は失見当ゲルストマン症候群の他、皮弁盲が認められた。入院後1週間Centrophenoxinを用いたが著しく、又翌日から高圧酸素療法を開始、3週間内10回行った。当初の合計25回行ったが、全般的に療法の改善(即ち視力改善、 Δ 口の簡単な図形のCopyが可能に近づいた程度)をみたが、1ヵ月後から急速によく有り、1ヵ

半月後、表例1と同様、中等度の脳出血性障害、失神とのこに遷化した。
本例は初期に可成り積極的な治療を行ったが、着明な改善の徴候、全例として表
例1と同様に自然覚醒の可能性も或程度考慮されるものである。

表例3は58歳の女子。原因は同様に煤炭コタツであり、CO吸入は7時間と推
定され、発覚後4時間にて覚醒。翌日は頭痛のみとなった。25病日から言語不明
瞭、言葉に手とまりのないことに気づかれ、次第に無欲状、無関心となった。1週
後本院に入院。動作緩慢と軽微な振戦、常同行為、痲果が認められた。17日目
から1カ月半に亘って前後13回の治療を行った。入院後7カ月間は進行性で
高圧酸素療法に拘らず、痲果は高度となり、失禁も始まり、括約筋も反応なし。
しかし、1カ月半頃から好はれて「ハイ」と返事するようになり、数唱も或程度可能
となったが、2カ月目頃から四肢の筋強剛と四肢の振戦は更に高度となり、8カ月目
の現在、殆ど不変である。

表例4は36歳の男子。本年2月9日、跛房用石臼ストーブを消し忘れて就眠。翌
日正午、約14時間後昏睡状で発見救出された。30分後入院。入院時の主要検査成績
のうち、CtHbは意外に低値で、 PaO_2 は55mmHgとヒネキセミアが認められた。
脳液は全例等に4~6%のO₂液が検出された。救出後2時間目より第1回の
高圧酸素療法を開始。以後1カ月間に13回行われた。意識は33病日には清明
となったが、ゲルストマン症候群、構音失行、抑うつなど現われ、20日後にはこ
れらも殆ど消失した。ところが43病日から表情弛緩、動作緩慢となり、ゲル
ストマン症候群が再び明瞭に認められた。脳液も正常に復つてきたが、同日には
脊液が全例等に出現した。翌日事故で急死し、剖検の状態を得られなかったが、本
症は(不完全)痲果型と考えられる。本症例は発病当初から高圧酸素療法を中心と
して強力な治療を行ったにもかかわらず精神と痲果状の遷延も承じ、43病日には
明らかな痲果のみならず、この意味で本療法の効はなかつたものと考へられる。